

日本IT書紀

024 開成所

02 溟滓篇
卷之三 薄靡

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二十四

開成所

一

ペリーの黒船が徳川将軍に献上した「伝信器」が江戸湾のお台場で実験に供されていたころ——すなわち元治元年（一八六四）である。

この年の一月、將軍徳川家茂が上洛し、朝廷に横浜を鎖港することを奏上した。尊王を誓ったことが攘夷断行を約束したこととなり、幕府は窮地に立たされた。二月には松平慶永が京都守護職に任じられ、三月には武田耕雲斎を頭目とする水戸学派の志士が筑波で決起し、京都ではしきりに「天誅！」の二文字が飛び交うようになった。

新撰組が池田屋を襲い、長州、土佐の勤皇攘夷派の暴発組を討ったのは六月五日である。

これに怒った長州藩は軍勢を催して京都に迫り、七月十九日にいたって御所に強訴するに及び、これを阻止せんとした幕府方会津・薩摩の軍兵との間に合戦が繰り広げられた。

いわゆる「禁門の変」がそれであって、京都の町に起こった大火は二百余りの寺社と八百十一の町並みを焼き尽くした。京都に火を放ち騒乱状態を生む、という勤皇攘夷暴発組の目論見は凶らずも実現したが、天皇の動座という最終目的はついに達せられなかった。

戦いに負けた長州は久坂玄瑞、真木和泉を失い、英仏米蘭四か国の艦隊から下関を砲撃され、西南二十一藩の連合軍に包囲される中で幕府への恭順謝罪を誓わざるを得なくなった。

踏んだり蹴ったり、弱り目に祟り目というのはこのことだった。

時間の流れを輪切りにして断面を眺めれば、勤皇攘夷派は壊滅的な状況に追い込まれ、幕府は勢いを盛り返した。いずれにせよ一地方の一勢力がこれほど耳目を集めたのは、平将門以来、日本史上で類例がない。

世の中は騒然としている。

そうした物音を聞きつつ、江戸城外一橋門の幕府開成所で独り黙々と洋書の翻訳に取り組んでいる男がいた。八月に数えて三十七歳のこの者は、名を杉純道という。

ここで注釈を一つ。

開成所は東京・神田三丁目、学士会館の地にあった。

度重なる欧米列強の来航に伴う外交交渉の発生にともなう幕府は旧来の蛮書和解御用による対応では不十分であると考えた。単に文書を翻訳するだけでなく、列強諸外国の歴史や文化を研究し、幕臣のみならず国内諸藩の学才を育成する必要があると考えたのだった。

その総合的な機関として、安政三年（一八五〇）「蕃書調所」が開かれ、翌年正月から授業を開始した。文久二年（一八六二）「洋書調所」と改称、翌年「開成所」となった。明治元年（一八六八）の四月、新政府に引き渡され、のち諸種の専門教育機関を統合して東京帝国大学となった。ここに建つ石碑には「開成所跡」ではなく、「大学発祥の地」「日本野球発祥の地」とある。

杉純道が生まれたのは文政十一年（一八二八）八月二日、肥前大村藩の長崎本籠町である。出島、中華街に連なる坂上に位置死、唐人の荷物運搬などに用いた籠を作る職人が多く住んでいた。家業はフォン・シーボルトの流れを汲む蘭方医であったとされている。

早くに両親を失い、数え九歳のとき、時計師・上野俊之丞が経営する「上野舶来店」に奉公した。その三年後、上野俊之丞は薩摩藩主・島津斉彬の写真を撮影しているから、純道も手伝いとして目通りしているかもしれない。

学才を認められ、十七歳で大村藩お抱え医師・村田徹斎の書生となり、さらに弘化五年（一八四八）、二十一歳で大阪の緒方洪庵の「適々斎塾」（適塾）に入った。適塾への入門を許されたのは、緒方洪庵と純道の亡父がシーボルト門下で三天蘭方医家とされた坪井信道の兄弟弟子だった事情によっている。

この塾からは多くの志士、明治の学識が出た。主だったところでは、

橋本左内（安政の大獄で刑死）

箕作秋坪（東京師範学校摂理）

佐野常民（明治政府で大蔵卿、元老院議長、農商務相）

大島圭介（明治政府で工部大書記、学習院院長）

福沢諭吉（咸臨丸で渡米、慶応義塾を創設）

村田蔵六（王政復古のとき兵制を定めた）

坂本竜馬（大政奉還、維新後の指針を成した）

高峰讓吉（アドレナリンを発見、消化薬「タカジアスタ

ーゼ」を発明した）

手塚良仙（お玉が池種痘所を設立した）

長与専斎（内務省初代衛生局長となった）

など、塾生は三千人に及ぶ。

「塾」とはいつても、現今のそれとは大いに異なつた。全国から有為な青年が集まり、蘭学を通じて海外の事情を知り、それとともに徳川幕藩の将来を憂い、論を闘わせ、ときに激して気色ばんだ。抜刀し斬りかかった痕が柱や鴨居のそこに残っていた。

ただし純道の場合、適塾での勉学は思うに任せなかつた。栄養失調で脚気に罹り、彼の大阪での生活は病との闘いに費やされた。いったん郷里長崎に戻り、再び村田徹斎の書生として過ごしているうち、翌年二月、今度は大村藩の命令で江戸に出府することになる。

この江戸出府が杉の人生の転機となつた。江戸の藩邸に詰めつつ、やはり坪井門下の蘭方医・杉田成卿の門下に入った。

二

蘭方医は同時に西洋の文字と事情に明るい蘭学者であることが少なくなかつた。杉田成卿もその一人であつて、ペリーが幕府に手渡したアメリカ大統領ミラード・フィ尔蒙アの親書を翻訳した人物である。安政二年（一八五六）には蕃書調所教授となつている。

この時代、医師を志す若者がオランダ語の書籍から西洋

の事情を学び、それが倒幕維新の風雲を巻き起こし、あるいは事業を興すエネルギーとなるのだが、純道は軍略の道にも事業にも走らなかつた。もともと金銭に淡泊で、学究に向いた頭脳回路の持ち主だったのかもしれない。

嘉永四年、永代橋に住んでいた信州松代藩士・村上英俊のもとでフランス語、オランダ語、英語の対訳辞書「ハルマ」の日本語訳に従事した。この辞書は「三語便覧」の名で刊行され、明治初年に刊行された『仏英独三語便覧』のもととなつた。

このとき村上は幕府の蕃書調所で教授方を兼務していて、勝麟太郎と親交があつた。純道は村上に随身しているうち、勝の目に触れるところとなり、かつ知り合い、見込まれて勝の私塾「氷解塾」の塾長となつた。かたわら館林藩や紀州藩の江戸屋敷に蘭学教授として迎えられた。勝と純道の交友には、次のような逸話がある。

初対面から四、五日して、氷川町の勝宅を純道がぶらりと訊ねてきた。

このとき純道は、「ひとつどうでしょう。もしあなたが講義を面倒に思うなら、何とか代わりに教えることができる確かなものがありますか、お雇いになつてはいかがでしょう」

と勝に言った。

勝がその者の氏名と住まいなどを書きとめようと筆を用意すると、純道はニヤリと笑って、

「実はわたしですよ」

と言つてのけた。

その気分よさに、勝はその場で純道を塾頭に任じた。

話としてでき過ぎているようにも思うが、純道にはそういう軽飄なところがあったのかもしれない。あるいは、自分を斬りにやってきた坂本龍馬を反対に説き伏せて門下にし、ばかりでなく塾頭にした勝という人物の炯眼ともいえる。

アメリカ東インド艦隊司令長官のペリーが浦賀沖に來航したのが、杉の転機となった。安政二年、蘭学者として名声が知られ始めた純道を、老中・阿部正弘が自らのプレーンに起用したのである。阿部の私的顧問「侍講」ということだったが、「阿部家の家老」とする説もある。

同じときに阿部が召抱えたジョン万次郎とも知り合った。アメリカにおける人口統計や消費統計など調査や、児童への識字教育など新知識を手に入れたであろう。

勝海舟らが咸臨丸でアメリカに出航した安政七年（一八六〇）一月、杉は幕府の藩書調所教授手伝となり、元治元

年八月、開成所教授となった。「亨二（こうじ）と名を改めたのは翌年の慶応元年（一八六五）だった。

慶応二年四月、西洋に赴く機会があった。

老中・水野忠精が英国公使パークスと交渉し、五年間の留学生受け入れの承諾を得た。安政三年（一八五六）十月に上程した留学生派遣の建白は、阿部正弘から水野忠精に引き継がれていた。幕府は一行の取締役として杉か、中村敬輔を候補とした。ところが、留学生のなかに杉の縁者がいたために、結局、中村が選ばれた。

杉の縁者とは、甥の杉徳次郎であった。幕府遣英留學使節団の名簿の中に、

開成所教授職並亨二厄介甥 同所英学世話心得 杉徳次郎 年十七

の文字が見えている。

杉徳次郎は同年十月、英国の郵船を乗り継ぎ、上海―香港―シンガポール―セイロンなどを経てエジプトのズエズに上陸した。ここから大陸横断列車に乗ってアレキサンドリアに至り、再び汽船に乗ってロンドンに到着した。

以後、福沢英之助・年二十、箕作奎吾・年十五などとともにロンドン大学の予科に学んだ。のち大政奉還の報を受

けてパリに移り、たまたま万国博覧会のためにパリに居合わせた徳川昭武の助力を得て、明治元年帰国。ただ帰国後は、明治政府に活躍の場は与えられなかった。

ちなみに一行を引率した取締役・中村敬輔は、江戸城が無血で明渡しとなったことを知って、名を「敬太郎」、のち「正直」と改めた。名を改めることで新しい時代に向かう決意を示したのであろう。

英国留学から帰って翻訳した『西国立志編』『自由之理』は、明治の思想をかたちづくったとされる。

福沢諭吉を「三田の聖人」と称するのに対置して、中村正直を「江戸川の聖人」という。幕府昌平黌教授、東京帝國大学教授、元老院議員、女子高等師範学校を創始して初代校長、貴族院議員を歴任し、一八九一年没。

三

元治元年八月の時点で、杉純道が世の中の騷擾に無縁、無関心であったとは考えにくい。適々斎塾での知己や勝塾の塾生がさまざまな方面で活躍している。適々斎塾での挫折から十三年の間に、幕府は勅許を得ず米欧列強諸国と開国の条約を結び、将軍後継者問題で揺れ、安政の大獄が開明的な志士に恐怖を与え、梅田雲浜、橋本佐内、頼三樹三

郎、吉田松陰が死罪となっていた。

加えて勝海舟らが咸臨丸でアメリカに向かうに際して彼は団員に選ばれることを期待したが、その選から漏れていた。開成所教授方の任命は、いわばその代償として与えられたに過ぎなかった。少なくとも杉においてはそのように理解された。

なるほどおのれは武術において非力である。

学才においては福沢諭吉、中村敬輔には及ばないかも知れぬ。

——しかし、このようなところで諸々と蕃書に向かうだけでいいのか。

という焦燥があったに違いない。

開成所はそもそも村上英俊が勤務した蕃書調所を改組・発展させた機関で、元治のころにはオランダ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアといった欧米列強諸国の言語教育のほか、天文、地理、数学、物産、金属精煉、器械・製図、印刷などの研究が行われていた。なかでも重視されたのは軍事科学に関する教育と研究だった。

杉は村上とともに日本語とオランダ語、英語、フランス語の対訳辞書を編集したとき

——ヨーロッパには「Statistic」というものがある。

ことを知った。

このとき日本には「統計」という言葉がなかった。そこで杉は「調」という言葉をそれに当てた。調べた結果を表にするので「調表」と表現し、政治向きの「調」は「政表」と区別した。

開成所で取り組んでいたのはセバストポール戦争とその後、ヨーロッパ情勢に関する各種の報告書だった。それを翻訳する中で、杉はヨーロッパの複雑な政治状況を理解した。ヨーロッパ列強と交渉するには宗教、ことにキリスト教の宗派の違いを認識しなければならない。

同じキリスト教ではあっても、ヨーロッパ大陸の王室の多くはカソリック派である。また市民には「プロテスタント」と総称されるルーテル派、レモンストラント派、バプテスト派、メソジスト派などに分かれていた。

これに対して英国教会はカソリックからの分派だが、国内において市民と対置する関係にあり、さらにロシア・ロマノフ王朝が擁護するロシア正教はヨーロッパ・カソリックと水と油ほどの違いがあった。

セバストポール戦争は、一八五三年から五六年まで足かけ四年間にわたってロシアとオスマン・トルコの間で行われたクリミア戦争の趨勢を決めた。本来は交通・貿易の要衝であるバルカン半島の領有権をめぐる紛争だった。

そこに聖地エルサレムの領有・管理という問題が絡んできた。このためにイギリス、フランスが介入した。

一八五四年九月、トルコ、イギリス、フランスの三国連合軍六万がクリミア半島に上陸し、ロシアのセバストポール要塞を包囲した。結果としてロシア軍が要塞を放棄してトルコが勝利を収めたのだが、両軍はここで十一月に及んで対峙し、食糧が欠乏するなかでコレラが発生するなど悲惨な戦いとなった。

あるいは杉は、この戦争で活躍したフローレンス・ナイチンゲールを知り、彼女が統計に基づき近代衛生学を提唱したという知識を得た。のちにこの話が福沢諭吉に伝わり、北里柴三郎の土筆岡養生院に結びついた可能性がないでもない。

戦争は一八五六年の年初、オーストリアとプロイセンが調停に立ち、三月三十日にパリで講和条約が結ばれた。条約でロシアは黒海に艦隊を浮かべることが禁じられ、トルコ領内のギリシア正教徒に対する保護権も奪われた。ロシアは負けたのだ。

この敗戦によって、ロシア皇帝アレクサンドルⅡ世は諸制度の近代化に着手した。ヨーロッパ近代科学を取り入れて国内産業を振興するとともに、農奴解放を進めることになった。

この中で杉が注目したのは、戦争後のバイエルン王国が採った政策だった。

バイエルンの教育の事を書いたものが有た。それに、百人の中で読み、書きの出来る者が何人、出来ぬ者が何人と云うことが書いてあつた。其時に斯う云う調は日本にも入用な者であらうと云ふことを深く感じた。是れが余のスタチスチックに考を起した種子になつたのである。

若年の頃より、折角人間に生まれた上は、人のすること人は人がする。どうか人の爲ぬことを仕て置きたいと云ふ一念は何處やら心に存して居た。是れが余の心にスタチスチックの種を蒔いた様に覺える。

後年、杉は自叙伝でこう書いている。

プロシア公国やフランス帝国、ロシア帝国に国境を接するこの小国は、まず国内の兵を養育して周辺の守りを固め、一方では住民に文字を教え、人材を諸外国に派遣して近代科学を学ばせていた。さらに国力を測るために、国民の識字率や職業の構成比、家族構成、収入などを調査していたのである。

その調査は「スタチスチック」、のちにいう統計とい

うものだった。

——このような調査が、この国にも必要になる。

尊皇攘夷、開国佐幕の両陣営が鋭く対立し、相互に殺傷を繰り返すばかりの「志士」の行動は、杉の眼にはあまりにも危なげに見えるのである。尊土であれ攘夷であれ、開国であれ佐幕であれ、欧米列強に抗していくには国力を強くしなければならぬ。

軍略家であれば陸兵と海軍の拡張という具体的なかたちを示すことができる。経世家であれば産業の振興と富を蓄える方策を打ち出すことができる。教育家は学校の建設や有為な人材の西洋留学という案を上提するであろう。ところが自分が考えるのは、調べるということである。その思いをどのようなかたちで表現するべきか、杉は皆目見当が付かなかった。

かくして杉は幕末風雲の中に乗り出すことなく、慶応四年（一八六八）四月十一日、水戸に退去する徳川慶喜に従って江戸から離れ、中央の舞台からいったん姿を消すことになる。

補注

徳川家茂 とくがわ・いえもち／1846～1866。第十一代将軍徳川家斉の孫に当たる。在任期間は安政五年(一八五八)～慶応二年(一八六六)だった。

上野俊之丞 うえの・しゅんのじょう／1790～1851。諱は常足。天保十年(一八三九)御用時計師の職を弟子に譲ったのち、硝石製法の技術的研究に着手した。薩摩藩・島津斉彬の写真を撮影した六月一日は「写真記念日」となっている。

杉田成卿 すぎた・せいけい／1817～1859。杉田玄白の孫。嘉永五年(一八四三)老中水野忠邦の命でオランダの政治書(国憲)を、天保十五年(一八四四)にはオランダ国王の親書を翻訳した。安政二年(一八五六)に蕃書調所教授となった。

ミラード・フィルムア Milard Filmore／1800～1874。

村上英俊 むらかみ・ひでとし／1811～1890。下野国(栃木県)に生まれ、信濃の松代で開業医をしていたとき、松代藩に取り立てられた。嘉永四年(一八五一)江戸に出て洋書の翻訳を行い、それが幕府に認められて蕃書調所教授方となった。明治維新後は私塾でフランス語を教え、一八八五年(明治十八)日本人で初めてフランス政府からレジオン・ヌール勲章を受けた。杉亨二とともに翻訳に当たった『三語便覧』は日本語、フランス語、英語、オランダ語の対訳辞書で、一八五四年(嘉永六)に初版が刊行されている。

水解塾 嘉永三年(一八六〇)開講され、坂本龍馬、杉亮二が塾頭を務めた。

慶応の遣英留学使節団名簿 このときの留学使節団の名簿が残っている。(『中村敬宇』(高橋昌郎、一九六六、吉川弘文館)および、『中村敬宇と明治啓蒙思想』(荻原隆、一九八四、早稲田大学出版部)。

福沢英之助 ふくざわ・えいのすけ。豊前中津藩士・和田慎次郎が「福沢諭吉の弟」と称して留学使節に参加した。

徳川昭武 とくがわ・あきたけ／1853～1910。徳川慶喜の異母弟で清水徳川家第六代当主、水戸藩第十一代藩主となり、のち水戸藩知事となった。従一位勲一等。

『西国立志編』 サミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles)／1812～1904)著で、「天は自ら助くる者を助く」の言葉から「自助論」の名で知られている。

『自由之理』 ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)／1806～1873)著

セバストポール戦争 一八五三年から五六年まで足かけ四年間にわたってロシアとオスマン・トルコの間で行われたクリミア戦争の趨勢を決めた要塞包囲戦をいう。キリスト教の聖地エルサレムの領有管理をめぐるロシアとトルコが戦端を開き、イギリス、フランスなどが介入して国際紛争に発展した。以後、バルカン半島は「世界の火薬庫」と呼ばれるほど国際紛争の火種になった。

戦いはロシア優勢で展開されたが、一八五四年九月にトルコ、イギリス、フランスの三国連合軍六万がクリミア半島に上陸してロシアのセバストポール要塞を包囲した。結果としてロシア軍が要塞を放棄してトルコが逆転勝利を取めたが、両軍はここで十一か月に及んで対峙し、食糧が欠乏するなかでコレラが発生するなど悲惨な戦いとなった。

ナイチンゲール Florence Nightingale / 1820 ~ 1910。クリミア戦争で敵味方の区別なく治療に当たった。近代医学において医療関係者は献身的思想を持つべきであるとする思想を形成し「看護婦」という専門職を確立した。また統計を用いて衛生管理の重要性を説いた。近代衛生学の祖とされる。

土筆岡養生院 東京の三田（現在の港区芝公園）にあった結核患者の療養施設。福沢諭吉と森村市太郎が北里柴三郎に土地と資金を提供した。日本における細菌病研究拠点となっただけでなく、世界三大病理研究機関のみに数えられた。

日本IT書紀 024 開成所

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。